

● 地域医療支援学レター



WE LOVE

ちいき

地域医療の橋わたし



● 活動報告・セミナー報告

● リレートーク第52回『この地で生き、この地で診る。
大田で育つ、地域医療の力』

大田市立病院 病院長 山形 真吾 先生 総合診療科 医長 向田 千夏 先生

島根大学医学部
地域医療支援学講座

令和7年8月22日(金)

地域医療体験実習Ⅰ(夏季地域医療実習) & 実習報告会

【参加者】37名(学生22名)
島根大学 15名
鳥取大学 2名
自治医科大学 5名
横浜市立大学 2名



島根県内7圏域の保健所や医療機関の協力のもと夏季地域医療体験実習が実施され、全国4大学から22名の医学生が参加した。

8月の猛暑のなか、地域の医師や多職種の指導を受け、診療所や訪問看護で住民と関わった。中でも、運転免許の返納問題や人口減少の実態など、地域特有の課題に触れ、現状への理解を深めることができた。実習先での振り返り会では、学生自身が地域医療の現状や課題を整理・考察して発表した。

最終日は、実習先の方も交えオンライン報告会が開催された。5グループに分かれて「印象に残った体験」「地域医療の魅力と課題」「課題解決のための提案」をテーマに議論した。高齢化社会の生活支援の難しさや過疎地域の医療提供体制について熱心に考察した経験が、将来の地域医療への関心と意欲の向上につながることを期待する。

令和7年8月27日(水)

島根県知事表敬訪問

【場 所】島根県庁6階大講堂

【参加者】島根大学医学生 14名 鳥取大学医学生 3名 島根大学教員 4名

令和7年度に入学した島根県医学生地域医療奨学金貸与学生17名が、島根県の医療に対する関心と使命感をさらに高めることを目的に、丸山達也島根県知事を表敬訪問した。

医学生代表4名が、「生まれ育った島根で患者や家族の思いに寄り添える医師を目指し、責任と誇りを持って学業に取り組む」と力強く決意を表明し、日頃からの温かい支援に感謝の言葉を述べた。

これに対し丸山知事からは「島根の地域医療を支える医師として活躍を期待している。勉学に励み、多様な人々との交流や課外活動も積極的に楽しみ、有意義な学生生活を送ってほしい」と励ましの言葉を送られた。

最後に知事と学生が個々で写真撮影を行い、知事の名刺を頂くなど和やかな交流の時間が持たれた。学生達にとって、知事を身近に感じる貴重な体験となった。



松江市内3病院見学バスツアー

【場 所】松江生協病院・松江赤十字病院・松江市立病院

【参加者】島根大学医学生 14名 鳥取大学医学生 3名 島根大学教員 4名

令和7年度入学の島根大学・鳥取大学の島根県医学生地域医療奨学金貸与学生17名が、松江市内3病院を巡るバスツアーに参加した。

松江生協病院では、実際に透析治療の現場を見学し、透析治療の仕組みに強い関心を持った学生から「もっと勉強したい」との声が聞かれた。

松江赤十字病院では手術室を見学し、「数年後、自分の手で手術を行っていると思像すると、身が引き締まる思いがした」と、将来の自己を想像し意識が高まった様子であった。

更に、松江市立病院では、現場で働く先輩医師から学生生活や進路に関する話を聞く機会があり、「とても参考になり、これからの自分の将来像をより具体的に描けた」との感想も寄せられた。

病院見学を通して、最新の医療技術や地域に求められる医療の現場を肌で感じ、学生達は大きな刺激を受け、学ぶ意欲と医師としての志を新たにした。



令和7年9月6・7日(土・日)

学生報告シリーズ第1弾

オキフェス2025

しまね総合診療の集い学生参加支援

【場 所】隠岐の島
【参加者】16名
【主 催】隠岐病院
島の医療人育成センター
【報告者】医学科 6年
中本 幸乃さん



令和7年9月6・7日の2日間、オキフェス2025に参加し、地域社会の理解を深める貴重な機会を得ることができました。

特にグループワークでは、安全な出産を実現するための政策や、フィールドワークで得た情報をもとに、隠岐への移住促進策について議論し、多様な意見を交わすことで幅広い視点を養えたと感じています。

また、交流会ではバーベキューや釣りを通じて島民の皆さんと親しく触れ合うことができ、隠岐ならではの温かい人柄や豊かな自然を体感できたことが印象深かったです。

島の魅力を現地で直接感じることで、地域と医療が密接に結びついている現実を実感し、今後の医療活動における「地域との連携」の重要性を改めて認識した機会となりました。

令和7年9月13・14日(土・日)

学生報告シリーズ第2弾

ウェスタンカーニバル2025

しまね総合診療の集い学生参加支援

【場 所】浜田医療センター
【参加者】76名
【報告者】医学科 2年
石井 真我さん



この研修会に参加し、島根県西部の魅力を感じながら、地域医療の現状について深く考える貴重な機会を得た。

1日目は、現地で医療を支えておられる方々の講演を聴き、県西部の医療者不足の課題やそこに込められた思いを共有した。地域の医療を守るために尽力されている方々の熱意に触れ、私自身も将来、医療者として住民の暮らしを支えていく決意を新たにしました。

その後の交流会では、BBQや石見神楽の鑑賞を通して地域の医療者や参加学生と語り合い、普段は得られない交流を楽しむことができました。

2日目は、ピアノ演奏を交えた企画の中でアドバンス・ケア・プランニングについて考え、患者や医療者が共に良い「これから」を模索していく姿に深く心を動かされた。この経験を糧に、今後も地域医療への理解を深め、より良い医療を目指して精進していきたい。

令和7年10月1日(水)

研究室配属

【配属期間】令和7年9月1日(月)～
令和7年10月1日(水)
【実習生】医学科3年 6名



当講座の研究室配属では、「チーム医療と多職種連携の理解」と「地域包括ケアシステムを通じた実践的スキルの習得」を目標としている。

本年度は、地域の診療所、訪問看護ステーション、保健所、消防本部、がんサロン、地域医療連携センター、済生会江津総合病院、浜田市など、多岐にわたる現場で実習に臨んだ。

特に浜田市旭町では、梨農園での作業や移動販売「あさひ号」への同行を通じて、地域の産業や人々の暮らしに深く触れることができた。また、訪問看護への同行では、住民の生活背景を肌で感じ、医療が地域社会と密接に結びついていることを強く実感することができた。

報告会では、活発な意見交換を通じて学びや課題を共有した。今回の貴重な経験が、学生たちにとって将来の医師像を深く考察し、地域に貢献する医療人となるための大きな一歩となることを期待している。

令和7年10月3日(金)

横田高校と島根大学医学部との高大連携

【場 所】島根大学医学部
看護学科棟N21、
大会議室
【参加者】25名(高校生14名
医学生6名)



横田高校との「高大連携事業」を継続的に行っている。今回は、聴診器を用いて心音の聴診や、皮膚縫合の医療体験実習を行った。意見交換の場では、高校生の探究活動の紹介や進路相談を交えた授業を実施した。

高校生からは「医学部のイメージが変わった」「夢や目標に向かって頑張ろうと思えた」「勉強のやる気につながった」といった前向きな感想が寄せられた。一方で医学生にとっても、高校生の高いモチベーションに刺激を受け、先輩としての自覚や責任を改めて感じる機会となった。

このような取り組みを通じて医療への関心を深めてもらい、地域医療を担う人材の育成へと繋げていきたい。

令和7年11月1日(土)

第4回しまね総合診療の集い

【場 所】島根大学医学部
みらい棟4階ギャラキシー
【参加者】医師16名
医学生4名
【講 師】済生会江津総合病院
原田 愛子 先生
佐々木 拓志 先生



第1部は原田愛子先生、佐々木拓志先生を講師に迎え、済生会江津総合病院の地域医療の実践や抱える課題、地域に根ざした医療の強みについて講演が行われた。続くディスカッションでは、県内各地域の医師、研修医、学生らが活発に意見を交わし、地域医療の現状を共有するとともに、今後の総合診療専門医の方向性や育成の在り方について理解を深めた。

第2部では「総合診療医らしい事例検討」をテーマに、吉村菜実先生による学生・初期研修医を対象とした「BPS/PCCM講義」と、専攻医・指導医を対象とした「医学教育講義」が村上航太郎先生によって行われた。その後、若手医師によって提示された事例を専攻医のファシリテートのもとで多角的な検討と振り返りが実施された。

世代を超えた交流から学びが生まれ、今後への期待感を持ちながら閉会した。

令和7年11月1・2日(土・日)

学生報告シリーズ第3弾

浜田市金城町の産業祭

「さざんか祭」に参加して

【場 所】浜田市金城町
多目的広場
【参加者】医学生12名
【報告者】医学科3年
天願 由依菜さん



私たち地域医療研究会(以後ちいけん)は「島根大学医学部with波佐診療所」として参加しました。

当日はメンタルヘルスをテーマにブースを設け、来場者にエゴグラム(性格診断)検査を体験していただきました。また、子育て世代の方々にも気軽にお立ち寄りいただけるよう、キッズスペースも設置しました。2日間で延べ120名を超える多くの方にご来場いただき、「初めてのエゴグラム検査、かなり当たっていて驚いた」「子供が遊べるスペースは助かった」など、嬉しい声を多数いただきました。

地域の皆様と直接交流する中で、多くの学びや気づきを得る貴重な機会となり、ちいけん全体としても地域とのつながりをより深めることができました。

最後に、開催にあたり多大なるご支援・ご協力を賜りました諸先生方、地域医療支援学講座の皆さま、波佐診療所の皆さま、そして本活動に関わってくださった全ての皆さまに、心より感謝申し上げます。

令和7年9月12日(金)

ワークライフバランスセミナー 「笑い療法で心身のケアを学ぶ」

【講師】笑医塾 塾長・小児外科医 高柳 和江 先生

【場所】島根大学医学部附属病院 みらい棟ギャラクスー4階

【参加者】71名(学生7名)

参加者一同が待ち望む中、高柳先生が満面の笑みで登壇されると、会場は一瞬で明るい雰囲気包まれた。

先生は10年間クウェートの国立病院で小児外科医として従事された中で、「笑顔が患者や家族に大きな力を与える」ことを実感された。そこで帰国後、「本当の笑い」を広めるため癒しの環境研究会を立ち上げ、不安を抱える多くの人のため尽力された。

講演では、世界で活躍する女性として、コロナ禍において疾病率や死亡率の低減に成功したドイツのメルケル首相を例示し、人々に語り掛け、寄り添う姿勢が大切だと述べられた。また、女性には自己評価を低く見積もる“インポスター症候群”が多いことにも触れ、もっと自信をもって活躍してほしいと力強く語られた。

さらに、2人1組で互いに褒め合うワークも行われ、気恥ずかしくも前向きな言葉を伝え合ううちに、自然と笑顔があふれていた。終始あたたかく前向きな雰囲気、心が元気になる笑顔と、様々な学びを得られるひと時となった。



地域交流会

「ごうつ地域医療交流会2025」

日時: 令和7年8月23日(土)

参加者: 20名(学生 4名)



「大田市出身医師、医学生と大田市、大田市立病院の交流会」

日時: 令和7年8月25日(月)

参加者: 20名(学生 6名)

「浜田の医学生を応援する会」

日時: 令和7年10月31日(金)

参加者: 22名(医学生 9名)



SEMINAR REPORT

セミナー報告

地域医療セミナー

令和7年10月17日(金)

働きながら救急診療の基本を学ぼう!
「みんなでABCDEアプローチを学ぶ」

【講師】広島大学 救急集中治療医学
三谷 雄己 先生

【参加者】35名(研修医 15名 医学生 14名)

今回のセミナーは、益田赤十字病院で研修中の遠藤智宏先生の企画で、「みんなの救命救急科」の著者である三谷雄己先生をお迎えし開催した。

救急診療の基本であるABCDEアプローチについて、クイズを交えた講義と、9グループに分かれて救急蘇生用マネキンを使い実践的演習が行われた。

参加者は互いに声を掛け合い、実際の救急現場を想定した動きを交え、知識と技術の両面から学ぶことができた。また、学生からも活発に発言があり、会場は終始活気に満ちていた。

初期対応の流れを身体で覚える貴重な機会となり、「実践的で理解しやすかった」「ゲーム感覚で学べて楽しかった」「自信がついた」といった感想が参加者から寄せられた。

本セミナーを通じて、地域医療の現場で求められる救急対応力の重要性を改めて実感することができ、非常に有意義な学びの場となった。

令和7年11月7日(金)

「スタッフが離職しない病院の作り方」

【講師】株式会社World Life Mapping代表
シビリング研究プロジェクト リーダー
医療組織健康マネジメント協会 副理事長 下田 彬 先生

【参加者】74名(大学院生 4名)

講演で、医療現場ではノンテクニカルスキルの重要性が高まっており、個々が専門性を発揮する「チーム・オブ・エキスパート」と、互いを補完し合い成果を最大化する「エキスパートチーム」の違いが示され、後者を育成する組織運営の必要性が強調された。

講演の中で参加者同士「大切な人に勤めたい職場とは何か」等グループワークを行い、活発に意見の交換や学びを深めることができた。

また、管理職がスタッフの幸福度を軽視すると離職が増えること、退職には人間関係や教育体制、勤務負担、新人フォローなど複数要因が関与することが議論された。さらに、情報伝達の滞りは組織機能を低下させるため、管理職には状況認識と適切なコミュニケーションが求められると指摘された。心理的安全性向上には無条件肯定や建設的対話を増やし、否定的ストロークを抑える姿勢が重要とされた。

キャリアセミナー

令和7年7月22日(火)

医師になる君たちへ伝えたいこと

【講師】島根大学医学部附属病院卒後臨床研修センター
教授 大嶋 直樹 先生

【参加者】23名(学生 9名)

先生は当大学卒業後に消化器内科に入局。当時はまだ地域枠制度は存在しなかったが、40名以上の同期が大学に残り、全体に母校を盛り上げようという強い雰囲気を感じられたそうである。

その後、県内外での診療や研究を通じて専門性を高められ、炎症性腸疾患の分野では難病研究班の一員としても活躍された。さらに、ご家族と共に渡米し、免疫の研究に従事され、研究成果のみならず、家族と過ごしたその時間自体が、先生の人生観を大きく変える経験になったと振り返られていた。帰国後は地域医療支援センターで若手医師の支援に尽力され、「内科プロジェクト」を立ち上げ、内科医の育成にも大きく貢献されている。

最後に先生から「どんな未来が訪れても、生き残れる実力を身につけ、選択肢を広げておくこと。そして、誇りを持って母校や島根の医療に貢献して欲しい」と、力強いメッセージを頂いた。

令和7年9月22日(月)

人との出会いを大切に。
私が考える小児科・新生児科の魅力

【講師】島根大学医学部 総合周産期母子医療センター
助教 山本 慧 先生

【参加者】19名(学生 9名)

「多くの出会いに支えられ成長できた」と語る山本先生は、幼少期に近所の開業医に憧れて小児科医を志し島根大学に入学された。その後、ご指導いただいた小児科医の人柄と熱意に惹かれ、卒業後は島根で小児科医になると決意されたそうである。

研修医時代、NICUで懸命に生きる赤ちゃんの姿に胸を打たれ、新生児医療の道を選ばれた。埼玉医科大学総合医療センターでは経験豊富な指導医のもとで年間900例近い症例に携わり、現在も動脈管開存症の研究に取り組んでおられる。

最後に未熟児で出生した児の家族から贈られた動画が紹介されると、会場は感動に包まれた。先生は、「小児科は新生児から中学生まで幅広く、多様な専門性を発揮できる魅力ある分野。特に早産児や染色体異常児の命を救い、家族とともに成長の喜びを分かち合えることがやりがい」と話された。

令和7年10月7日(火)

島根生まれ島根育ちの脳神経外科医
～これまでと、これから～

【講師】島根大学医学部 脳神経外科講座
講師 吉金 努 先生

【参加者】59名(学生 41名)

セミナーは「もともと臨床医になるつもりはなかった」「人生は一度きり、好きなことをしていきたいという思いがあった」という衝撃的な発言から始まった。

吉金先生は臨床実習で小児や脳血管障害の患者と向き合った経験から、人の命に関わる医療の重みを知り、脳神経外科の精密さと責任の大きさに強く惹かれたそうである。

「島根の医療に貢献したい」と思いを語る先生は、島根県を“高齢化が進む日本の20年後の姿”と表現され、この地で医療を学ぶことに意義があると語られた。また「勤勉であること、真摯に学ぶこと、手術を安全・確実に行うこと」という師匠の教えを軸に、技術と思いを次世代へ継ぐ責務を述べられた。

最後に、「期待してくれる人の思いを胸に、『これは』と思ったら信じ続けてほしい。それがあなたの力になる」と力強いメッセージを贈られた。

令和7年11月12日(水)

日常から考えるキャリアのヒント

【講師】島根大学医学部 放射線科
医科医員 河原 愛子 先生

【参加者】15名(学生 10名)

先生は島根県立中央病院で初期研修を行い、診療科選択では内科と放射線科で迷ったものの、全身を横断的に診られ、診断と治療の双方に関われる点に魅力を感じ、放射線科を選択された。放射線科は、学んだ内容が日々の診断に直結する分野であり、正しい診断が治療につながる瞬間に大きなやりがいを感じると語られた。

講演では、緊急IVRにより症状が改善した救急症例や、MRI所見の疑問が新たな知見につながった症例が紹介された。また、北米放射線学会学術集会2024(RSNA2024)では、水痘・帯状疱疹ウイルス感染の神経学的合併症を整理した教育展示が高く評価され、「Certificate of Merit」を受賞されたことにも触れられた。

さらに、子育てと仕事の両立についても言及され、周囲の協力と日々の工夫の大切さが述べられた。

最後に、島根だからこそ経験できた症例が研究や自身の成長につながったと振り返り、放射線科の魅力を力強く語られた。

